第3分科会

高校中途退学を考える

最初に、実行委員の三田和子さんから、「自分の子どもから高校中退者が多いという話を聞き、その子どもの状況やフォローはどうなっているのかという疑問が生じました。社会とのつながりを無くした子ども達が、希望を持って歩んでいけるようにするにはどうすればよいか、考えたかった」と、このテーマを設定した思いが話され、話し合いに入りました。

次に、ゲストである藤岡緑陵学院理事長の小松慎二さんから、ご自分が実際に関わった事例をいくつかあげられました。「大切なことは、子どもだけではなく、その親も悩んでいることを認め、サポートしていくこと」「本当に好きなことでなければ、子どもはついてこない」ということを話されました。

このような子どもを指導していく上で必要なことは、まず場所を確保して継続すること。高校の卒業資格が取れるようにすること。個人情報の保護をきちんと行うことなどがあげられました。

その後、高校の先生や教育相談員、サポートセンターの職員などの方々から体験談が話されました。まとめとして、高校を中退するという決断をした時、その後どう歩めばよいか、自分一人で悩まず、身近なサポートセンターなどに早めに相談することがよい、ということで終了しました。（M・H）

第4分科会

ゆめを抱く

まず始めに、立場の違う3人のパネリストから、お話を伺いました。

全国社会就労センター協議会副会長の阿由葉寛さんから、次のようなお話がありました。「3月11日に発生した東日本大震災の被災地にある障害者就労支援事業所に駆けつけた時、指定されている避難所ではなかったので、公的支援物資が届けられていなかった。指定されている避難所に行くことのできない高齢者、障がい者の施設にも支援指定をしてもらう必要性を、この時痛感した。今『障害者保健福祉法』の改正を検討している」。

「ガッツの会」会長の斎藤実さんは「技術の進歩で目が見えなくてもパソコンを使いこなし、献身的なボランティアさんのおかげで、情報は十分得られるようになった。健常者の方とほとんどかわらない。自ら生きるという考えを持ち、新しく法律ができることを望む」と話されました。

（左から）辺見さん、斎藤さん、阿由葉さん、山岡さん

足利市社会福祉協議会会長の山岡美和子さんは、地区社会福祉協議会について、「共に生き、共に支え合い、人と人との対話のあるつながりを持ち、心豊かに過ごせる居場所を作る活動をしていきたい」と心を込めて話されました。

いろいろな立場の人たちを、それぞれの立場から応援し「すべての人々が幸せだと思えるような町を」と願う、夢の持てる分科会でした。

最後に、実行委員の辺見きよ子さんの「この企画がスムーズに運べたのも絆のおかげ」という言葉が心に残りました。（Mi・O）

＊＊＊編集後記＊＊＊

東日本大震災から１年がたち、かすかではありますが、復興への足音が聞こえてきたように思います。この足音をより確かなものにするためには、人と人との繋がりが欠かせないものになると思います。

今回のフォーラムでも共通して出てきた言葉が「絆」でありました。

玄田先生がおっしゃる、ウィーク・タイズの輪を広げ、夢と希望あふれる日本にしていきたいものです。（M.H）

●編集　「かけはし」は市民の編集委員と人権推進課が共同で年2回発行しています。<編集委員>大川　眞、沖　道子、樫村美智子、菊地正之、保々政司（50音順）
●発行　足利市総務部人権推進課　〒326-0823 足利市朝倉町264　TEL73-8080　FAX 73-8066　●E-mail　danjyo@city.ashikaga.lg.jp
●ホームページアドレス　http://www.city.ashikaga.lg.jp　●表紙の題字は根岸君子さんです。